現代フルートによるバロック音楽の演奏法

The performance method of the baroque music with the modern flute

プロジェクト代表者：竹澤栄祐（教育学部・准教授）
Eisuke TAKEZAWA（Faculty of Education・Associate professor）

１．研究の目的

Ｊ．Ｓ．バッハ（1685～1750）が活躍していた時代（バロック時代）に演奏されていたフルートは「フラウト・トラヴェルソ」と呼ばれ、現在一般的に使われているフルート（「フラウト・トラヴェルソ」に対して「モダン・フルート」と呼ばれる）の祖先である。現在までにこのフラウト・トラヴェルソを含めたこの時代に用いられていた楽器（いわゆる「古楽器」）の研究は飛躍的に進み、それらを使ったその時代の演奏法による演奏が頻繁になされている。研究者は、J.S.バッハの作品を中心にその他のバロック時代のフルート作品について、これらの古楽器演奏の研究を踏まえた上で、モダン・フルートを用いてバロック音楽をどのように演奏するのか、その場合の問題点を明らかにしながら実際の演奏会（2002、2004 年のリサイタル、東京、王子ホール、など）を通して研究を進めてきている。そのひとつのアプローチの仕方としては、木管のフラウト・トラヴェルソから金属管のモダン・フルートへと変わってきた素材の移り変わりに着目し、あえて木管のモダン・フルートでこれらの作品を演奏することが挙げられる。こうすることによって、金属管で演奏する場合よりも容易にバロック時代の作品に求められる、より繊細で細かいニュアンスの変化をつけることが可能になると考えられるからであるが、本研究の目的は、実際にバロック時代に使われていたフラウト・トラヴェルソを演奏研究しこの楽器の特性を探ることから、このことを演奏会の場を通して実証することである。

２．研究の過程

フラウト・トラヴェルソに関する詳細な研究をした結果、1 キーのフラウト・トラヴェルソが使われていたバロック時代から古典派前期の時代にかけて、年を重ねるごとに様々な改良がなされており、作られた年代により違いがあることがわかった。本年度は、日本の楽器店で入手できた、バロック後期より少し後の時期（前古典派から古典派）に Carl Augustin Grenser(1720～1807)によって作られた楽器のレプリカを購入した。フラウト・トラヴェルソを購入するのと同時に、バロック後期にこの楽器のために作曲された作品の中からテレマンやヘンデルらの自筆楽譜や初版楽譜のファクシミリを購入し、楽譜を研究しながら演奏研究開始した。また、古楽器で演奏された J.S.バッハの宗教曲の DVD を購入し、ヨーロッパの演奏家達の演奏を研究。その研究をモダン・フルートでの演奏に役立たせるよう演奏研究を進めた。

リサイタルのプログラムに、この研究を活かせるバッハのソナタ BWV1031 と前回のリサイタルでも取り上げた W.F.バッハのフルート二重奏曲のうち第 2 番(前回は第 3 番)を加えて、共演者（フルート、ピアノ）との合奏練習をしたのち、2006 年 11 月 23 日にリサイタル（東

京・王子ホール）を開催（自主開催）した。

３．成果の概要と今後の課題

フラウト・トラヴェルソの演奏研究から、この楽器の特性として、

・材質から来るやわらかい音色

・充実した低音域の音量に対して、脆弱な高音域での音量

・太くて温かみのある低音域の音色に対して、細くて甲高い高音域での音色

・モダン・フルートと比べた場合の運指の困難さ

などが挙げられることわかった。また、フラウト･トラヴェルはモダン・フルートに比べると、はるかに少ない息の量でやわらかく演奏しなければならないが、しかしそのことにより、より繊細な表現が可能となる楽器であることがわかった。この特性を活かすには、大きな音量で演奏することを目的として開発された金属管のモダン･フルートとよりも、材質が金属管よりもはるかに柔らかい木管の場合に有効であることが実証された。

実際に共演者の神田寛明氏とはフラウト・トラヴェルソ2本を用いて合奏練習を試みるなどしたのち、前述の特性も考慮しながらリサイタルを開催。特に前回のリサイタルに引き続き2本の木管のモダン・フルートによるバロックの二重奏では、バロック音楽の新たな演奏スタイルを確立した。なお神田氏とは2007年12月にも引き続きこのスタイルで演奏会を開催することが決まっている。

このリサイタルに対しては、東京藝術大学金昌国教授らからも高い評価を得ている。

また、フラウト・トラヴェルソの発展を調べていくなかで、18 世紀前半バロック後期から古典派において 1 キーのトラヴェルソが音孔の位置を変えてゆくことにより、より高音域を出しやすく、またより大きな音量を出しやすい楽器に改良して行くことが明らかになった。これが古典派、ロマン派となるにしたがって、さらに大きな音量そして高度なテクニック、またより正確な音程が要求されるようになり、しだいに 4 キーから 8 キーへ、そしてさらに多いキーを持つ楽器へと改良がなされ、やがてベーム式フルートが開発され普及した。過去にフラウト・トラヴェルソがそうであったように、ベーム式フルート（モダン・フルート）も現在では様々な改良が試されて、欧米ではすでに 4 分音、8 分音まで演奏可能でベーム式フルートよりもさらに多くのキーを持つ The Kingma Quartertone System Flute（キングマ・フルート）が注目されていることを、この研究を続ける中で突き止めた。この新しいフルートがどのように古い音楽を演奏する場合に活かせるのか、ということも視野に入れてさらに研究を進めて行きたい。

もう一つの課題としては、今回研究した A.Grenser 作のフラウト・トラヴェルソと、この楽器より少し前の時代に作られた Johannes Hyacinthus Rottenburgh(1672～1756)や Jacob Denner(1681～1735)作の楽器とを、物理的にまた演奏を通して比較、さらにその楽器の作られた時代に作曲された作品同士も比較することにより、1 キーのフラウト・トラヴェルソが時代の要求によりどのように変化していったかを考察し、その研究結果をモダン・フルートで演奏する際に活かす研究も継続して行っていきたい。